

幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価

四天王寺大学短期大学保育科 准教授：松山 由美子

研究成果の概要(和文)

牧場体験を核にしたプログラムを実施したことで、領域「健康」に含まれる、食（牛乳・乳製品）への興味や関心、領域「環境」に含まれる、自然環境（牧場や動物）への興味や関心が高まり、保護者も実感するほどの幼児の変容が見られた。

さらに、幼稚園のカリキュラムに、ただ牧場体験を追加しただけではなく、「思いやりの心を育てる」ことを園の目標にしている幼稚園の実情を踏まえて牧場体験とそれに関するプログラム（食育、多様な表現活動、遠隔交流）を意識して実施することで、先行研究では見られなかった領域「人間関係」に含まれる社会性の発達、領域「表現」及び「言葉」への興味・関心が高まった。領域「環境」も、自然環境だけではなく、「牛乳」を媒介とした買い物場面（社会環境）への興味・関心も高まった。

以上の成果は、牧場体験を含む食育プログラムが幼児にとって心から楽しみ学ぶことができるものであったからだと思われる。そのうえで、幼稚園の目標を具体的にプログラムに意識して活動を構成することで、プログラムにおける課題だけではなく、幼稚園のもつ潜在的な課題も明らかになり、牧場体験を核にしたプログラムの改善を通して、子どもも保育者も共に成長することを可能にした。

研究分野： 保育学 幼児教育学 教育工学

キーワード： 牧場体験 思いやり 幼稚園における食育活動

1. 研究開始当初の背景

心身の成長が最も顕著な乳幼児期は、食習慣の基礎を確立する時期でもあり、幼稚園・保育所において食育に取り組むことは重要である。しかし、古都・山口（2012）によると、保育者がもつ「食育」の視点としては、「給食での指導」と「好き嫌いの改善」、「野菜の栽培」、「子どもの調理」などにとどまっていることが報告されている。また、大阪府における平成20年度に大阪府食育推進プログラムが実施した「幼稚園・保育所における食育実施状況アンケート」の結果からも、幼稚園での食育は増加したが、その内容は「野菜の働き」68.7%、「食事マナー」67.4%、「偏食」60.7%であった²⁾と報告があり、食育と言えば野菜、マナーなど給食を通じた保育、偏食（好き嫌い）の改善と一致していることが分かる。

食育の本来のねらいである「食べる行為が食材の栽培といのちを育む営みとつながっていると感じる」「食べ物を媒体として人と話すことができる環境をできるだけ多く作り自分の作ったものを味わい、生きる喜びにつなげる」体験を大事にしつつ、幼稚園や保育所で気負いなく取り組める食育のカリキュラムの開発が求められている。

そこで、本研究では、いのちを育む営みとつながっていると感じやすい牧場体験を取り入れた食育活動の教育プログラムを開発し、実施、評価する。本研究では、食育に初めて

取り組む幼稚園でも取り組みたいと思えるような活動にするために、初めて食育に取り組む幼稚園（大阪府 新光明池幼稚園）を実践先に選定した。さらに、食育をすでに実施している幼稚園（埼玉県 坂戸あずま幼稚園）との協同的なカリキュラム開発と教員研修を通して、保育者にとっても取り組みやすく、かつ充実した食育活動になるよう研究を推進する。

教育プログラムの開発においては、牧場体験において、乳牛との触れあいや牧場で働く人たちとの交流を通して命の大切さや命を育むことを感じることをねらいとする。実際に2回牧場に行き、乳牛とふれあう体験をとおして、牛乳のもつ栄養がからだの成長・発達に大切であることを学ぶだけではなく、牛乳のできる過程やいのちの大切さについて感じるができることと考える。

次に、この牧場体験をもとに、幼児でも取り組めるような調理活動へと発展させる。牛乳が苦手でもおいしく摂取することができる料理体験として取り入れたい。

また、幼稚園での活動を、子どもたちが自分の言葉や絵画、造形、身体表現活動を通して表現する経験を取り入れる。この活動を通して、牧場体験だけではなく、好き嫌いの改善や調理体験活動をただ体験して「楽しかった」で終わらせるのではなく、子どもたちが自ら「話す」「聞く」「書く」「描く」「造る」「動く」という活動を通してより深く理解することができるかと予想している。

図1は、本研究で想定している活動内容を幼稚園教育要領や保育所保育指針に示された5領域の観点で整理したものである。このような、「乳」を中心教材として用いた総合的な食育プログラムは国内において未開発であることが、本研究の意義を高めている。

幼稚園や保育所の交流活動については、保幼小連携をふまえた近隣の園同士、もしくは小学校、中学校との交流が多いが、メディアを活用することで新しい交流の形を提案できると考える。

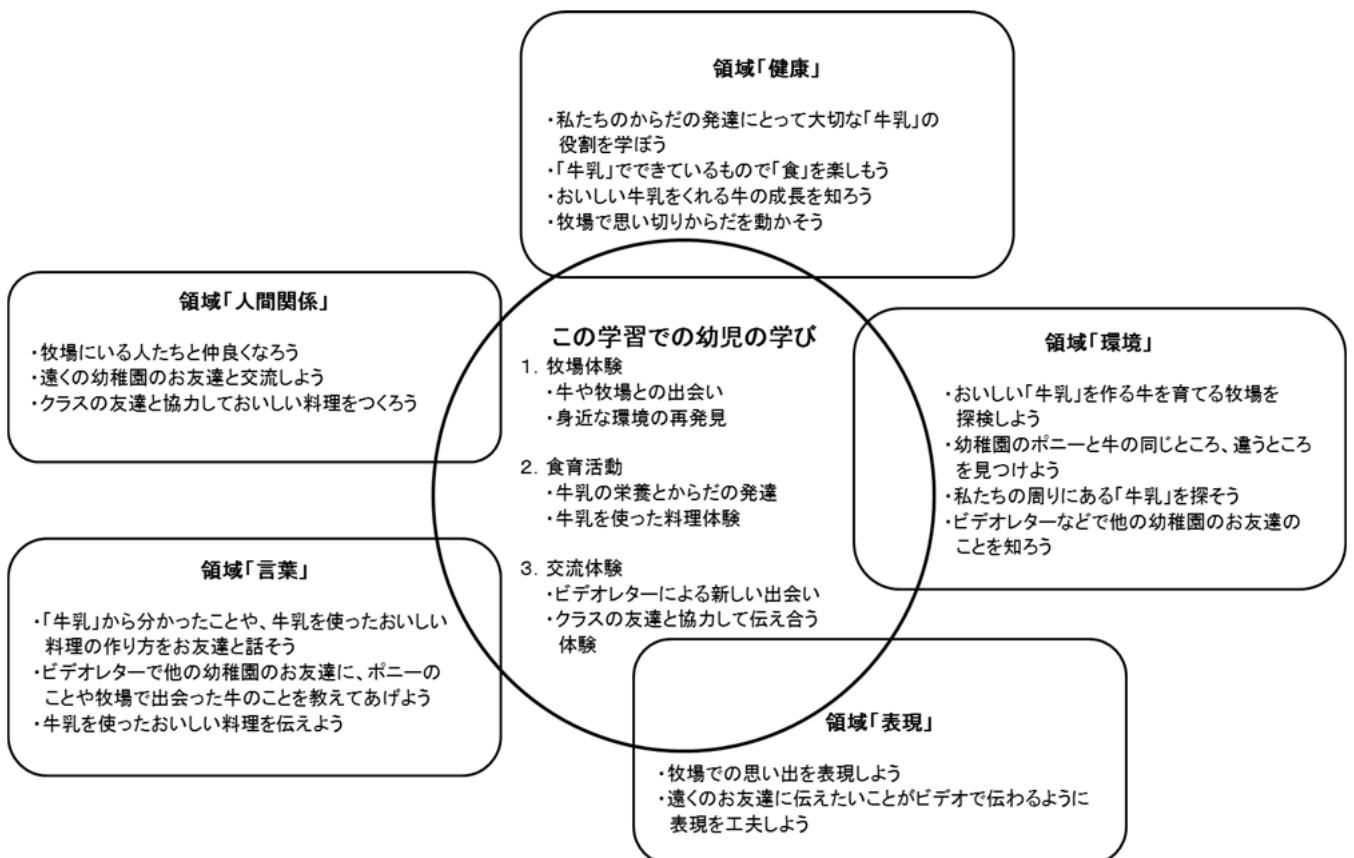


図1 本研究が目指す、牧場体験を取り入れた食育における幼児の豊かな学び

最後に、本研究の評価研究として、開発・実施した食育プログラムの効果検証を、保育者へのインタビュー及び交流相手園の活動に関する相互評価アンケートの分析により実施するとともに、保護者に対して、子どもの食習慣の変容や食べ物を大切にする態度などを観点とした食育状況調査を実施することによって行う計画である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、食育に牧場体験を取り入れることで、子どもたちの五感をフルに活用した食や命の学びを形成するプログラムを開発することである。また、そのプログラムは、食育に初めて取り組む幼稚園にも気負いなく取り組めることを前提としている。

そのため、幼稚園教育要領の5領域に基づくねらいと活動内容をふまえてプログラムを作成し、幼稚園教諭と協力しながら実施する。また、幼稚園ではあまり実践例がないが、子どもたちの学びをより深化させ、気づきを確かなものにするため、メディアのもつ鏡的な利用をねらいとした遠隔交流を取り入れる。

3. 研究の方法

本研究は、平成25年度（2013年4月～2014年3月）の1年間を通して実施する。筆者と共同研究者の田中博之（早稲田大学大学院・教授）を中心に、初めて食育を実施する幼稚園用のプログラムを開発する。開発したプログラムは、共同研究者の内藤真希が園長を勤める新光明池幼稚園（大阪府和泉市）の年長児85名を対象に実施する。

開発したプログラムの評価は、子どもたちと接している担任教諭（3クラス3名）への聞き取りや質問紙調査によって得られた回答をもとに、保育者と研究者と協議しながら形式的に行う。その際、田中(2011)の小学生における牧場体験の評価方法で使用したルーブリック評価表³⁾を作成し、分析及び考察を行う。さらに、保護者への質問紙調査を行い、より詳細な子どもたちの学びの姿を明らかにし、プログラムの評価の1つとする。プログラムは5月に大枠を作成するが、活動ごとに担任教諭たちと見直し、随時、子どもや幼稚園の状況に合わせて改良しながら実施する。

4. 研究成果

研究の成果について、1) 開発したプログラムのねらいと内容（プログラム実施事前調査(家庭への調査)結果を含む)、2) 開発したプログラムの実施と子どもたちの学びの姿、3) プログラムに関する保護者の意見による評価（事後に保護者アンケートを行った活動のみ）、4) プログラムの個々の活動内容についての担任教諭の評価、5) 研究の総括と課題、について報告する。

4.1 開発したプログラムのねらいと内容

食育に牧場体験を取り入れることで、子どもたちの食育を単に「給食での指導」と「好き嫌いの改善」、「野菜の栽培」、「子どもの調理」などにとどまらない、「食べる行為が食材

の栽培と命を育む営みとつながっていると感じる」「食べ物を媒体として人と話すことができる環境をできるだけ多く作り自分の作ったものを味わい、生きる喜びにつなげる」体験を豊かにしたプログラムが開発できると考えた。

そこで、牧場体験を中心に、5領域をふまえて子どもの五感を刺激し、命を大切にし、食を大切に作る心を育てるプログラムを開発することとした。

プログラムの実施対象園となる幼稚園は、普段から領域「表現」と、動物との触れあいを中心にした領域「環境」を重視したカリキュラムで幼稚園教育に取り組んでいる園である。この強みを活かすようなプログラムを考えていくことが、プログラムの実施に対して担任教諭たちが気負いなく取り組めると考えた。

5月の時点におけるプログラムの概要は、以下のとおりである。

- 1) 子どもが本物の牛に接するには1回では難しいとの判断から7月と11月の2回を設けることにした。
- 2) 牛乳を用いた調理体験については、子どもたちが牛にじゅうぶん慣れ、落ち着いて観察等ができた想定される2回目の牧場体験の後、12月に設定した。
- 3) 子どもたちが学びをより確かなものにするための遠隔交流は、2園の牧場体験及び食育の実施状況を見ながら考えることとした。
- 4) 上記3点をより意義あるものにするため、牧場体験の事前学習を領域「表現」「環境」を中心にしながら5領域を総合的に含む内容で構成することとした。

なお、上記概要(4)で述べた、5領域との関連は以下のとおりである(前掲 図1参照)。

- 1) 領域「健康」: 食育そのものに相当するが、特に牛乳に対する興味や関心を広げたり深めたりする内容を取り入れることと、初めての幼稚園での調理体験を楽しいものとし、命と調理への関心を高める。身体全体で牧場体験をはじめとするプログラムを楽しむような内容とする。
- 2) 領域「人間関係」: プログラムの一つひとつの活動を友達や周りの人、初めて出会う人たちとも協力して行うような形をとるよう意識する。
- 3) 領域「環境」: 幼稚園で飼っているポニーをはじめとした動物との交流の継続とこの牧場体験を関連させることで子どもの興味や関心の広がりや深まりをより確かなものにする。
- 4) 領域「言葉」: 言葉で伝える力を遠隔交流などで支援すること、言葉を使うだけではなく、友達や周りの大人の言葉を聞く力を意識することをねらいとした内容を入れることとした。そこで、クラス全員での話し合いの時間を充実させて(牧場体験前後、調理体験前後)、子どもたちの学びをまとめる時間を確保することとした。
- 5) 領域「表現」: 主に手あそびや身体表現による興味や関心を深めることと、絵を描くことによる学びのまとめを行うこととした。

このようなねらいをもとに、5月に幼稚園及び牧場との打合せを行った結果、具体的には以下のように進めることとした。

- 6月：牛に関する事前学習「パネル展」と、牛についての話し合いの時間。
牛に親しみをもつための表現あそび。
- 7月：紙芝居「牛乳からできる様々な製品」「牧場でのおやくそく」による学習。
牧場体験（1回目）及び、調理体験（アイスクリームづくり）。
ボディペインティングや絵日記による牧場体験の学びの振り返り。
- 9月：廃材による牛づくり（造形活動）及び交流学习
- 11月：牧場体験（2回目）
- 12月：調理体験（バターづくり）及び交流学习

次に、保護者へのアンケートを実施し、子どもたちの現状を把握することで、プログラムの詳細を担任教諭らと確認した。

子どもたちの牛乳・乳製品の摂取状況、動物への接触状況、食や調理活動への参与などについて調査した。幼児数 86 名中 82 名の保護者から回答を得ることができた。

牛乳や乳製品を摂りやすいであろうと想定して確認した朝食についての摂取状況調査は、3人が「週に5回」などといった回答であったが、それ以外は全員が毎日摂取している状況であることが分かった。33名が毎日のどこかで牛乳は「毎日飲む」と回答しているものの、16名は牛乳を「飲まない」と回答していること、しかし、一方で乳製品については「好き」「普通」合わせて80名であったことが明らかになった。

また、保護者が意識して牛乳や乳製品を摂取させているかという問いに関しては、2名の保護者以外は「たまに」「よく」意識しているという回答から、保護者の同意も得やすいであろうと考えた。ちなみに、摂取させていないと回答した2名の保護者は、子どもも牛乳は嫌いで飲んでいないと回答した保護者と、子どもの牛乳に関する質問へは無回答である保護者であったこと、また「よく」意識して牛乳や乳製品を摂取させていると回答した保護者の中には、「3歳まで牛乳アレルギーだった」ことや、「動物性脂肪の摂り過ぎが気になる」こと、さらに「日本人の体質と牛乳について以前に勉強したことがありその結果を踏まえて」摂取を控えるよう意識していると回答している保護者も見られた。

先述の大阪府食育推進プログラムが実施した「大阪府における幼児の食生活状況アンケート」によれば、平成20年度の幼児の牛乳・乳製品の摂取状況は、「ほぼ毎日摂取する」が62.2%、「週に4,5日摂取」が16.2%と8割近くに達し、「ほとんど摂取しない」及び「摂取したことがない」を合わせても7.1%である⁴⁾ことが明らかになっている。大阪府の調査方法が「牛乳・乳製品」合わせての質問項目であるので、新光明池幼稚園の幼児と単純に比較することはできないが、牛乳は飲まない子どもが16名、うち2名は牛乳や乳製品を摂取させていないことから、この「牛乳は嫌い」な子どもたちに対して、また、保護者に対しても牛乳への興味や関心が高くなり、少しでも好きになってもらえるように意識できるようなプログラムを開発することとした。特に、乳製品に対しての「嫌い」がかなり少ないことから、牛乳を用いた調理体験はより牛乳への興味や関心を高めることについて非常に有効ではないかと予想された。

調理体験への参与に関する事前調査では、多くの子どもが買い物への同行と配膳のお手伝いを経験していることが明らかになった。包丁やピーラーで怪我をした体験をもつ子どももいたため、あまり難しい調理はしない方がよいらろうということにした。

最後に、動物との触れあい体験に関する事前調査では、幼稚園で飼っているポニーとの触れ合いは全員がえさやりなどで1度は経験しているが、それ以外に家庭でも近くの水族館や牧場などで経験している子どもがほとんどであった。その経験は概ね楽しいものであったとの回答であったが、「あまり楽しくなかった」「怖かった」と答えている保護者が4名おり、その理由が「動物が大きくて怖かった」「(動物に対して子どもが)小さかった」と回答していることが明らかになった。そのため、牧場へ行く事前学習では、大きさを具体的に示し、できるだけ牛の大きさによる怖さを払拭することをねらいの中心に据えることとした。

4.2 開発したプログラムの変更

研究者による素案をもとに、園長及び担任教諭による打合せ、保護者アンケートの結果をふまえてプログラムの詳細を計画し、6月より実施していったが、実施中に問題点が2点出てきたため、内容を変更することとした。

問題の1点目は、遠隔交流を実施する園どうしの交流が難しくなったことである。交流園として設定していた坂戸あずま幼稚園の子どもたちの牧場体験が12月になってしまったことで、延期しての交流が難しいと判断されたことである。イギリスとの遠隔交流も経験している坂戸あずま幼稚園に対して、プログラムの主となる牧場体験を話題にすることができなくなったことは、初めての遠隔交流となる新光明池幼稚園側の不安をさらに増幅させたため、無理しない方がよいであろうと判断した。

そこで、遠隔交流については削除するか、実施のしやすい近隣の園との交流にするか、もしくは体験させていただいた牧場との交流にするか、この3点に絞って新光明池幼稚園の園長と話し合った結果、牧場との遠隔交流を実施し、子どもたちが再び牛や牧場の人たちと出会うことで、この1年の学びを振り返ることができるようにすることとした。

問題の2点目は、天候不良が続いたことによる2回目の牧場体験の実施が難しくなったことである。幼稚園のある大阪では記録的な風雨の日が続き、休園にする日もあった。10月に行う予定の毎年の園行事(運動会や音楽会等)を優先したため、2回目の牧場体験の日程が取れなくなってきたことである。しかし、子どもたちの学びの姿から、1回目の牧場体験で牛を怖がらずに全員が乳搾りを楽しむことができたことや、子どもたちの牛への興味や関心が9月以降もかなり強かったことをふまえて、無理に実施せず、12月の調理体験にそのまま進むこととした。

最終的に、この1年のプログラムは以下のとおり実施された。

新光明池幼稚園におけるプログラムの実際

6月：牛に関する事前学習「パネル展」と、牛についての話し合いの時間。

牛に親しみをもつための表現あそび。

7月：紙芝居「牛乳からできる様々な製品」「牧場でのおやくそく」による学習。

牧場体験及び調理体験(アイスクリームづくり)。絵日記による牧場体験の学びの振り返り。

9月：牧場へのお手紙を書く。廃材による牛づくり(造形活動)。

11月：作った牛を中心にした作品展における牛についての学びのまとめ。

12月：調理体験(バターづくり)。

3月：牧場との遠隔交流による学びの振り返り。

また、変更に伴い、この学習における幼児の学びと5領域の関連は以下のように整理しなおされた。その際、新光明池幼稚園では「思いやりを育む」保育を幼稚園全体の目標としていることから、5領域それぞれの「思いやり」について考え直し、具体的な内容を計画する際の基本に据えることとした。

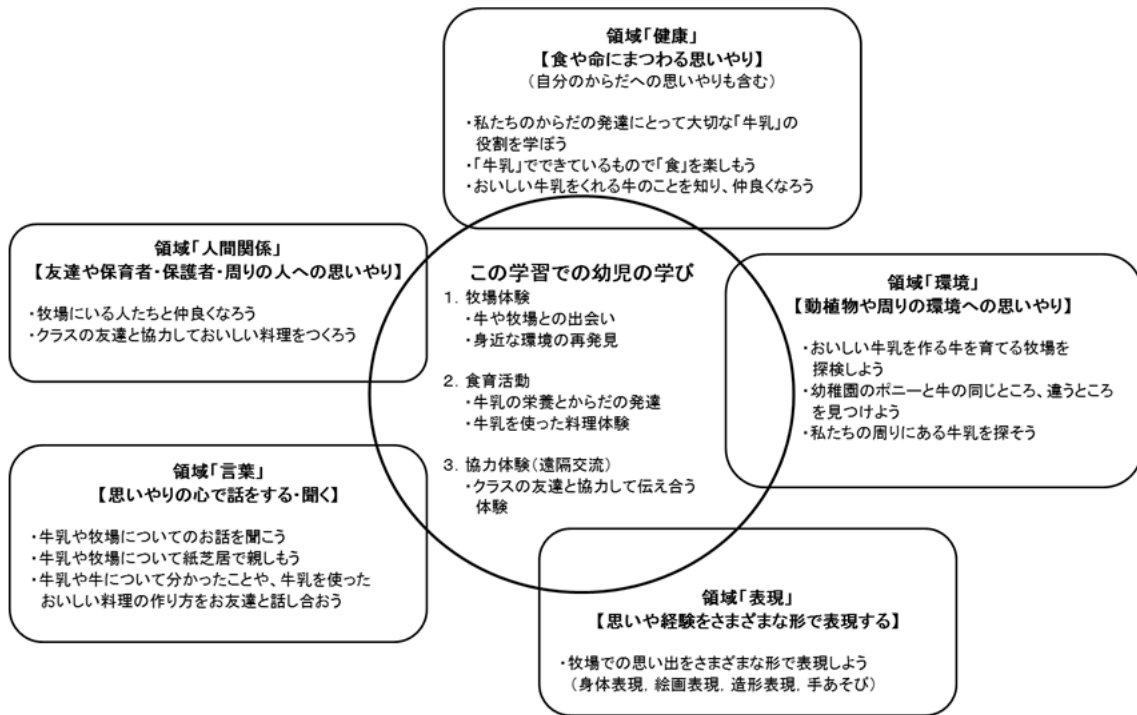


図2 本研究が目指す、牧場体験を取り入れた食育における幼児の豊かな学び(変更実施版)

- 1) 領域「健康」:【食や命にまつわる思いやり(自分のからだへの思いやり)】
牛について五感を通して学ぶなかで命への関心を高める。牛について学ぶ中で牛乳や乳製品について興味や関心を高める。
- 2) 領域「人間関係」:【友達や保育者・保護者・周りの人たちへの思いやり】
牛について知っていることをお互いに意見を話したり聞いたりすることで、友達に自分の意見を話す楽しさを知ったり、友達の思いに気づく。また、牧場の人たちの気持ちを考えて行動することで牧場でのあそびや学びを楽しむ。
- 3) 領域「環境」:【動植物や周りの環境への思いやり】
幼稚園で飼っているポニーをはじめとした動物との交流をもとに、牛や牧場への興味や関心の広がりや深まりをより確かなものにする。牛の大きさや酪農についての興味や関心を高める。身の回りの牛乳や乳製品により関心をもつ。
- 4) 領域「言葉」:【思いやりの心で話をする・思いやりの心で話を聞く】
牛について自分の知っていることを言葉で伝え合い、話し合うことを楽しむ。また、友達や牧場の人たちなど、周りの大人の言葉を聞くことを楽しむ。
- 5) 領域「表現」:【思いや経験をさまざまな形で自分なりに表現する】
乳搾りを意識した手あそび、牧場や牛への興味や関心を身体による表現を楽しむこ

とで興味や関心を深める。牧場での思い出を自分らしく表現することを楽しむ。

4.3 プログラムのねらいと実施・評価

プログラムの実際に沿って、各活動の概要とねらい、活動中の子どもの姿、保護者アンケートの結果、及び活動の評価を報告する。

4.3.1 事前学習（6/24～7/16）

幼稚園で飼っているポニーをはじめ、動物に対する愛情を育み、思いやりの心や生き物への興味・関心を育む保育に以前から取り組んでいる新光明池幼稚園では、年間を通して自然に園内で見られる生き物に興味や関心が高まるように指導・援助を行っている。ポニーへの乗馬体験、えさやり体験は年に1度、5月末から6月初旬に行われている。今回の対象となった年長児については、約半数が未就園児クラス（3歳未満児クラス）からの持ち上がりで、3歳になるまでにすでに親子でポニーへの乗馬とえさやりを行っている子どもたちであった。4歳児クラス及び5歳児クラスは子どものみでえさやりと乗馬体験を行うが、その活動についても年長児全員が体験している。

このような毎年の体験の中での子どもたちのようすから、ポニーに対してあまり近づこうとしない子どもや、ポニーは好きだけでもくさいから近づきたくないという子どももいることを保育者は理解していたため、4月にはもっと身近な動物（園庭にいる小動物、昆虫など）に子どもたちの興味や関心が高まるよう工夫した保育を行っている。なお、毎年同じ動物ではなく、子どもたち自身の興味や関心に沿って動物は選定される。このプログラムを実施した年度はダンゴムシであった。

ダンゴムシへの興味や関心の高まりを観察活動やダンゴムシへの愛情の育みへと展開しながら、5月末にポニーとの触れ合い活動へと進む。5歳児ともなると毎年経験している内容なので、特に怖がる子どももなく、この年も問題なく全員が体験することができた。しかし、園長はじめ保育者たちは2点悩みを抱えていた。1つめは、毎年の経験であること、また、毎日当たり前のように保育室のすぐ傍の馬小屋にポニーがいることなどから、ポニーに対してもっとよく見よう、もっと調べようという気持ちにならず、「今年も楽しかったね」という体験だけで終わってしまうことである。そして2つめは、「雪が降ったらポニーはどうするの？」というような優しい気持ちはあるものの、日々の中で「雨が降ったらポニーの近くはにおいがすごいね」と口にして、ポニーを敬遠する子どもも少なからず存在することである。

毎年続いてきたこの2つの悩みを解消することが、牧場体験を成功させるためには必須と考えていたため、事前学習の充実を図ることにした。

事前学習では、保護者アンケートでも記述に表れており、また、牧場の下見に行った保育者が真っ先に感じたことと事後インタビューでも話してくださった「大きいことへの恐怖の払拭」と、ポニーへの触れ合い体験や日々の保育の中で園長や保育者が感じていた「臭いに対する思いやり」の育成の2点を子どもたちに考えさせることをねらいとした。

5領域への対応は以下のとおりである。

- 1) 領域「健康」：牛について五感を通して学ぶなかで命への関心を高める。牛について学ぶなかで牛乳や乳製品について興味や関心を高める。

- 2) 領域「人間関係」：牛について知っていることをお互いに意見を話したり聞いたりすることで、友達に自分の意見を話す楽しさを知り、また、友達の思いに気づく。
- 3) 領域「環境」：幼稚園で飼っているポニーをはじめとした動物との交流をもとに、牛や牧場への興味や関心の広がりや深まりをより確かなものにする。牛の大きさや酪農についての興味や関心を高める。
- 4) 領域「言葉」：牛について自分の知っていることを言葉で伝える楽しさ、友達や周りの大人の言葉を聞くことを楽しむ。
- 5) 領域「表現」：乳搾りを意識した手あそび、牧場や牛への興味や関心を身体による表現を楽しむことで興味や関心を深める。

また、五感での学びとの関連は以下のとおりである。

- 1) 視覚：牛の大きさについて比較物などを見て具体的に学ぶ。
- 2) 聴覚：保育者や友達の話聞くことで学ぶ。
- 3) 触覚：該当なし。
- 4) 嗅覚：ポニーのおいについて子どもたちと話すなかで、牛にもおいがあること、また、私たち人間にも体臭があることを学び、さまざまなおいについての感情を共有しつつ、どうすれば人間も動物も楽しい気持ちで共生できるかを考え、行動できる。
- 5) 味覚：該当なし。

各クラスでの導入は、クイズ形式になったパネルを提示するのみにとどめ、子どもたちがどういう反応をするか保育者たちは見守るだけにとどめた。子ども全員が何らかの反応を示した頃を見て、全クラス一同に会しての事前学習を3人の保育者が協力して実施することで、これらのねらいを達成することとした。

牛の大きさについては、下見に行ってきた保育者と牛とが並んで写った写真を見せるだけでなく、「先生何人分かな？」と問いかけ、3人の保育者が実際に並んで動きながら大きさを確認させた。また、新聞紙で実際の牛の大きさを表現し、子どもたちに提示した。新聞紙の牛は平面ではあるが乳の部分まで丁寧に再現されており、この新聞紙の牛を用いて乳搾りへの興味や関心を高めることができるように考えられていた。

大きさに驚く子どもも見られたが、この新聞紙の牛を年長組の保育室の廊下に貼り、自由に見たり触ったりすることで、子どもたちが大きさに慣れることができるよう配慮した。

その後、保育者からおいについての話を子どもたちは聞いた。ポニー体験や虫との触れあいのなかで感じたおいを思い出させることや、人間の体臭のこと、まだおむつがとれていなかった頃の話などをしながら、おいについてどう考えるか、どう行動するかを子どもたちに考えさせる時間を十分に確保した。例えば、牛がくさい時に「臭い」と言うことが牛に聞こえたらどういう気持ちになるかといった問いかけなどを通して、子どもたちに思いやりを行動で示すことの大切さを伝えた。

それから、実際に牧場へ行くことへの楽しみを深めるために、保育者がオリジナルで考えた手あそび『牧場の牛さん』を全員で楽しみ、最後にはみんなで牛になってあそぼうという身体による表現あそびを行って事前学習を終えた。

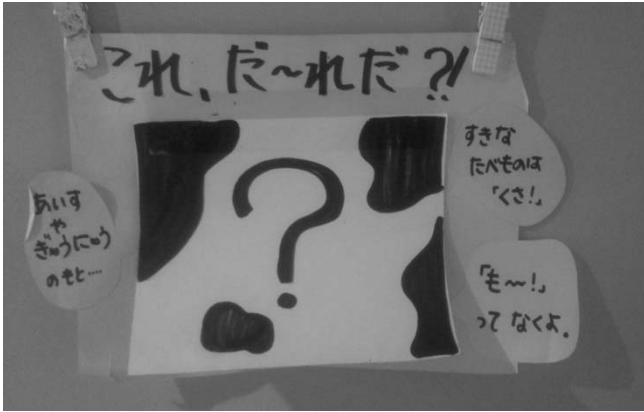


図3 各クラスに掲示したパネル



図4 牛の大きさやにおいについて学ぶ



図5 手あそびで楽しく学ぶ



図6 貼りだされた新聞紙の牛はみんなが乳搾りの練習に使っていました

手あそびは、オーストリア民謡・阪田寛夫作詞『山のごちそう』を改変して幼稚園や保育所、キャンプファイヤーなどで歌われている『大工のきつつきさん』（曲は同じだが歌詞が違う）をもとに、新光明池幼稚園の年長の保育者3名で歌詞を変えて作られた。

『牧場の牛さん』 詞：新光明池幼稚園年長担任 曲：オーストリア民謡

★緑の牧場に 牛さんがいた。 広い野原のなか 幸せに暮らす。

ホールディーア ホールディヒヒア ホールディクク (×3) ホールディヒヒアホー

- 1) 牛さんの大好物は 美味しい草です! ムシャムシャムシャ
(★を歌い、ホールディククの後にムシャムシャムシャを挿入し繰り返す)
- 2) 草をいっぱい食べて、幸せー! (頬に手を当てて「ポッ」)
(★を歌い、ホールディククの後にムシャムシャムシャ、ポッを挿入し繰り返す)
- 3) お腹いっぱいになったので、お散歩! (腕を前後に振って「のしのし」)
(以下、上と同じように付け足しながら繰り返す)
- 4) お散歩で疲れて、眠ります (眠るポーズで「グーグー」)
- 5) 美味しい牛乳が出てきたよ (乾杯のポーズで「おいしいー!」)

この手あそびについては、子どもたちにもなじみのある歌の替え歌でもあったため、ス

ムーズに楽しむことができ、特に牛乳が出てきて「おいしいー！」のところは男女を問わず大きな声が出て楽しむことができるものであった。子どもたちも大好きな手あそびの1つとなり、牛や乳製品に関連するものが出てくるとこの手あそびを思い出して口ずさむ子どもが3月にも多くいたことから、手あそびが子どもたちに受け入れられ親しまれていたことがうかがえた。

この学習の最後に、「楽しくって牛になっちゃった」と保育者が呼びかけて、全員で広い遊戯室を牛になって楽しむという活動をしてから各クラスに戻った。年長児ということもあり、恥ずかしがって牛になりきれない子どもも10名弱いたが、ほとんどの子どもは、保育者とともに牛になり、牧場へ行くことや牛に会える楽しい気持ちを表現することができた。



図7 牛の大きさを身体で表現



図8 牛になってあそぶ

最後に、各クラスへ戻り、牛について知っていることをお互いに話し合う機会をもった。クイズ形式のパネルですでに「アイスや牛乳のもと・・・」と書いてしまった部分もあったが、子どもたちからは以下のような回答が出た。

まず「牛乳から作れるもの」としては、バター、アイス、ヨーグルト、チーズ、ヤクルト、スープ、飴（ミルクキャンディ）、が挙げられた。牛の特徴としては「茶色い牛や黒いだけの牛もいる」「牛には手がない」「足が4本」「つのはオスだけ」「牛は服を着なくても毛がはえているのであったかい」「暑くなったら毛を刈る」といったことが挙げられた。他にも「牛は病院に行かなくても赤ちゃんを産むことができる」「牛と牛が闘う闘牛というのがある」「鼻についているわっかは何のためについているのか不思議」といった言葉が挙げられた。

さらに、事前学習やその時に見せた写真からは、以下のような回答が挙げられた。

「黄色い名札がついている?!」「耳に番号がついている」「草を食べる」

「先生50人分の大きさ」「しっぽが細長い」「耳が三角で小さい」「意外と足が細い」

「おっばいが大きい」「からだよりも顔が小さい」「足の爪、かたそうだな」

「どんな大きさ?赤ちゃんは大きいのかな?」など。

保育者は、子どもたちは自分の意見が言えることを大事にして取り組んだが、友達の意

見を聞くところまで意識できたベテラン保育者と、子どもの意見を集約することに集中しすぎて子どもたちどうしが聞くところまで援助が行き届かなかった保育者とが見られた。

最後に、全員で行った手あそび『牧場の牛さん』を楽しんでから、今日の事前学習の振り返りを確認した後、保育者が子どもでも乳搾りが簡単に分かりやすくできるように考えた「パー・ギョッ・1・2・3」という乳搾り手あそびを子どもたちと楽しんだ。

まず乳搾りができるように手を大きく開き（親指と人差し指の間に牛の乳がくるようにする）、ギョッの声で親指と人差し指で輪を作る、あとは1・2・3の順に中指、薬指、小指と乳を搾るように握っていく、というものであった。これも子どもたちに分かりやすく、この後から乳搾りの日まで、園のあちこちで聞かれるようになった。また、保育室の近くの廊下に掲示していた新聞紙牛の乳のところで、実際にこの手あそびを口ずさみながら練習している子どもも多く見られ、牧場に行くまでに、乳のところだけは搾られた跡で新聞紙にしわがで、よれよれになっているほどであった。

保育者と研究者で協議して出したこの事前学習活動の評価は、以下表1及び表2のとおりである。網掛けされた指標部分が各評価項目に対して保育者及び研究者が出した評価に該当する箇所である。

表1 「牛について話そう」の評価

牛について興味・関心をもつ	高い興味や関心がある	牛に興味を示す	牛に興味や関心が薄い
自分の思いを話す	知っていることを積極的に話す	知っていることを少し話す	あまり話そうとしない
友達の話を聞く	友達の話をしっかり受けとめて聞く	友達の話を聞こうとする	友達の話はあまり聞こうとしない
保育者の話を聞く	先生の話をしっかり受けとめて聞く	先生の話を見ようとする	先生の話はあまり聞こうとしない

表2 「牛について知ろう」の評価

牛について具体的に大きさを知る	牛の大きさを実感して知ろうとする	牛の大きさを理解する	牛の大きさに興味が薄い
牛のにおいについて知る	牛のにおいを自分など人間の体臭と関連づけて知ろうとする	牛のにおいを理解する	牛のにおいに拒否反応を示し理解しようとする
乳搾りについて知る	積極的に手を動かして学ぶ	やり方を理解する	興味・関心が薄い
牛の手あそびを楽しむ	牛や牧場を思いながら楽しむ	手あそびを楽しむ	手あそびをする
牛になりきってあそぶ	なりきって身体表現を思い切り楽しむ	牛になってあそぶ	恥ずかしくてできない

牛についての興味や関心は非常に高く、保育者の話を熱心に聞き、自分の思いや経験と

重ねて考えることはできたが、クラスによっては、友達の話聞くことがやや難しかった子どもや、牛になりきっての身体表現は恥ずかしくてできなくて立っただけの子どもも見られた。しかし、恥ずかしいだけで牛への興味がなかったわけではなく、牛になってあそんでいるようすをその場で楽しんで見ていたことから、表現への恥ずかしさであり、牛への興味のなさではないと保育者たちは感じていた。保育者の評価としては、「さあ牛になろう」と無理に表現させなくても、その場で楽しい雰囲気を共有できたことでじゅうぶんよかったと思うという結論となった。しかし「保育者が全員女性なのでかわいいあそびになりすぎたかもしれない。もう少しダイナミックに男の子にも取り組みやすいようなものにしてもよかったと思う」という反省・課題も出た。

4.3.2 牧場体験（7/22（話し合いは7/23））

牧場体験では、往復のバス内も含めて活動を設定した。「紙芝居による学び」「手あそび」「牧場や牛の観察」「乳搾り体験」「食育（アイスクリームづくり）」である。5領域への対応は以下のとおりである。

- 1) 領域「健康」：五感を通して牛や牛乳について学ぶなかで、牛乳や乳製品について興味や関心を高める。アイスクリームづくりや牛乳の試飲を通して、牛乳や乳製品への関心を高め、飲んだり食べたりすることに興味をもつ。
- 2) 領域「人間関係」：さまざまな体験を友達と協力して行うことを楽しむ。
- 3) 領域「環境」：牛や牧場への興味や関心をより広げたり深めたりする。牛の観察や牧場を五感で行い、牛や牧場について興味や関心を高める。
- 4) 領域「言葉」：牧場の人たちの言葉をしっかり聞き、楽しむ。友達と協力するために思いを言葉で伝え合う。牛のために自分の声の大きさを調節し、楽しむ。
- 5) 領域「表現」：乳搾りを意識した手あそびや牧場を楽しむ手あそびを楽しむ。今後、さまざまな形で表現したくなるような思いを牧場で高める。

また、五感での学びとの関連は以下のとおりである。

- 1) 視覚：牛や牧場の自然についてしっかり見て学ぶ。
- 2) 聴覚：保育者や牧場の人たちの話を聞くことで学ぶ。静かにすることを学ぶ。
- 3) 触覚：牛をはじめ牧場の自然に実際に触れて学ぶ。
- 4) 嗅覚：牛や牧場のにおいを感じる。牛乳やアイスクリームなど、普段当たり前前に接している食べ物の匂いを感じる。
- 5) 味覚：牛乳やアイスクリームを食べた味から新鮮な牛乳について学び、牛乳や乳製品への興味や関心を高める。

バス内では、紙芝居や手あそびを通して牛や牧場について学ぶ時間を設定した。紙芝居は中央酪農会議が作成した紙芝居『牧場でのお約束』『牛乳からできるさまざまな製品』の2つを使用した。難しい単語が出てくることや、一方的に紙芝居側から話しかける口調で進められることが幼児には難しいと判断し、保育者が紙芝居を通して子どもたちに話しかけ、問いかけるような形に作り変えられたものを使用した。

例えば『牧場でのお約束』では、「牧場では静かに」というところは「牧場の牛さんたち

はうるさい音が苦手です。みんな、これから牧場に行くけどお話ししたくなかった時、どうすればいいかな？」というように、保育者が問いかけ、子どもたちが考えたことを発表し、それを保育者が拾い上げて「そうだね、牧場では静かな声でお話しないと牛さんがびっくりしちゃうね」とまとめる、というふうに紙芝居を進めていった。子どもたちもただ牧場へ行く注意を受けるだけではなく、自分たちで考えて出した結果が約束ごとになるため、守ろうという意識も高まり、これから牧場で牛や酪農家の方に迷惑をかけずに一緒に楽しもうという気持ちも育むことができたと思われる。

さらに、復路での『牛乳からできる製品』についても、酪農家の方の話を思い出しながら問いかけて読むことで、子どもたちの興味や関心がより高まったと思われた。

実際には、高速道路を使用したこともあり、保育者がバス内で立って話をすることが難しかったため、後ろの方に座った子どもたちには紙芝居が見えない状況であったが、保育者が問いかけ、子どもの声を拾い上げながら進めることで、紙芝居がなくても子どもたちは理解し、楽しんで考えることができたと思われた。

牧場では、86人の子どもたちが全員スムーズに体験ができるように、牧場散策と乳搾りのチーム、アイスクリームづくりのチームという2つのチームに分かれて、午前と午後で活動を入れ替えて行えるようにした。

「牧場散策と乳搾り」では、乳搾り体験を担当してくれたおじいさん（高松昌弘さん）の説明を中心にポニーやさまざまな牛について観察・触れあい体験を行った後、おじいさんから乳搾りの仕方と牛についての説明を聞き、確認した後、一人ずつ乳搾りを行った。

牛やポニーとの触れあいでは、幼稚園のポニーと比較する声（ポポちゃんやジュンちゃんより小さいね、など）や、牛は優しいと思っていたけど、うるさくしたりして怒らせたら怖いこと（体操担当の男性保育者が少しおどけた時に牛が突き飛ばそうとしたようすを見て）、すごく大きいけど優しい目をしていることを話していた。においについても、からかうような「くさいー」という言葉を誰も発することなく、みんなで楽しめただけではなく、「思っていたほどくさくないね」と友達どうしで話している姿も見られ、子どもたちなりに牛さんを傷つけることなくこの牧場体験を楽しもうとしていることが明らかになった。



図9 乳搾り体験



図10 乳搾りの説明を酪農家から聞く

さらに、おじいさんから直前の諸注意を受ける場面では、子どもたちは、おじいさんの

言葉一つひとつを丁寧に聞きながらも、「幼稚園で乳搾りの練習をしてきたんだよ」と、「パー・ギュッ・1・2・3」を披露するなど、とても意欲的な姿を見せていた。

乳搾りは、怖がってなかなか牛の乳の下まで行くことができない子どももいたが、おじいさんの「大丈夫だよ」という言葉や、友達の「怖くないよ、ベティちゃん（乳搾りをさせてくれた牛）はおとなしくて優しいよ」という言葉に支えられ、全員が乳搾りを泣くことなく体験できた。「ベティちゃんはとっても優しくて、一生懸命我慢してくれていたよ」「（座っていた牛をおじいさんが立たせてくれたようすを見て）これから乳搾りをさせてくれるために一生懸命起きてくれたよ」などと子どもたちは小さな声で語っていた。自分の番が終わってからも、子どもたちは保育者に注意されることもなく静かにその場で待機することができ、また、友達を応援する時も、大きな声を出さないようお互いに「静かに！」と声をかけあいながら楽しんでいた。



図 11 牛と握手。牛を触ってみる



図 12 牛をみんなで観察

アイスクリームづくりでは、8人1組になり、卵を割ったり、かきまぜたりする作業を分担して楽しんだ。牧場の方の指示どおり、一生懸命、魔法の言葉「おいしくな一れ」とお互いを励ましあいながら、アイスクリームづくりを行った。魔法の言葉の掛け声が大きくなりすぎて保育者から注意を受けたぐらいで、子どもたちどうしの揉め事はなく、順番や時間を守って体験を楽しめた。かきまぜるだけの単調な作業であるが、誰一人、しんどい、疲れたと言わず、疲れたら交代してもいいところを「20 数えるまで（グループによって数は異なった）がんばる」とかきまぜていた。さらに、「ベティちゃんの牛乳からアイスを作るねんなあ」という言葉などから、アイスクリームという子どもが好きな食材であるだけではなく、今ここにいる牛の牛乳で調理できることに子どもたちは喜びを感じているようであった。

卵を割る作業についても、アイスクリームづくりがあるということで「家でお母さんと練習したよ」「卵を割るのはできるようになったよ」と多くの子どもが話してくれ、家庭でも意欲的に牧場体験をとらえて事前学習をさせてくださっていたことが明らかになった。

アイスクリームについては、全員が「とてもおいしい」「最高」と笑顔で食べていた。「今まで食べたアイスクリームの中で一番おいしい」と、自分で作ったものを食べる喜び、新



図 13 みんなで協力して作るアイスクリーム



図 14 かきまぜる係とボウルを持つ係

鮮な食材で作る喜び、友達と一緒に作った喜びをそれぞれが感じていた時間となった。全ての体験が終わり、搾りたて牛乳の試飲と、完成したアイスクリームの試食を最後に行った。あまくて、少しあたたかくて、いつも飲む牛乳と違いすごくおいしいと子どもたちは満足そうであった。牛乳が苦手だと言っていた子どもについて、1人は少し飲んだが「ごめんなさい」と言って全部飲めなかった。後は全員「いつもと違う」と驚きながら飲んだり、少し苦手な顔をしたりしながらも全部飲むことができた。



図 15 搾りたて牛乳で乾杯



図 16 みんなで作ったアイスクリーム

保護者アンケートからは、子どもたちの意欲に感動した声や、こんな体験ができてよかったという声が多数見られた。特に「友達と一緒にだったから牛を怖がらず乳搾りもがんばれた」という意見や「友達と一緒に経験することが家庭で牧場などに行くことと違って何より楽しかった」という意見も見られ、幼稚園で牧場に行くことの意義を感じさせる結果となった。

子どもたちが牧場体験で一番楽しかったことは何かについて、牧場体験の次の日、保育

者に問いかけて答えてもらったところ、子どもたちは「アイスクリームづくりが一番楽しかった」と答えていた。しかし、保護者アンケートからは「子どもは乳搾りを一番楽しかったと答えていた」という回答がわずかながらアイスクリームより多く、一番多く見られた回答であった。子どもたちにとって、初めての幼稚園の友達と共に行う調理体験でもあり、大好きなアイスクリームづくりだったため、その場は非常に盛り上がり、とても楽しかったに違いない。だが、静かにしていたため、一見盛り上がりを感じられなかった乳搾り体験も、子どもたちはじっくりとその感動を楽しんでいたようで、その感動を保護者に家庭で伝えていることが明らかになった。

「牛はとっても優しかった」「乳搾りをまたやりたい」「家のみんなにもさせてあげたい」と語っていた回答も多く見られ、乳搾りを通して牛への愛情が育まれていたこと、それを伝えたい気持ちが育っていることが明らかになった。また「おじさんに（乳搾りが）上手だと褒められたことをずっと語っていた」という回答も複数見られ、牧場の人たちの子どもたちへの対応が、子どもたちの乳搾り体験をさらによいものにしたことが明らかになった。実際、牧場のおじいさんから「初めてなのに全員が泣いたりせず乳搾りをできたことはすばらしい」と驚きも含めて子どもたちと保育者を褒めてくださった場面が園長や保育者にとっても印象的な場面であったと話し合いの中で確認されている。

牛乳についても「あんなあまくておいしい牛乳がまた飲みたい」「ジャージーの牛乳が飲みたい」「自分が搾った牛乳がおいしい」と語っていた回答が多く見られたことや、「買い物で牛乳を見ると語りだす」「おいしい牛乳が飲みたいと言うようになった」というエピソードが書かれていたことから、味覚を通して牛乳への思いをふくらませ、牛乳を飲むことへの意欲や買い物場面など動物や牧場とは異なる場面でも牛乳や牛を意識することができていることが明らかになった。

保護者からは「たとえたくさん飲めなくても、牛を大事にする心から牛乳を嫌いと言わなくなってくれたらそれでいい」「牛から牛乳ができるところを見せてもらい、そうやって食事ができていることを感謝してくれればそれでいい」という声もあり、牛乳摂取にこだわり子どもに無理に飲ませることよりも、動物へのあたたかい気持ちや感謝の気持ちをもつことを大事にしてほしいと思っている保護者もいることが明らかになった。子どもの声として、「くさかったけど我慢したよと話していた」という回答が複数あったことから、保護者の意識が牛乳摂取よりも子どもが他への思いやりの心を育むことに期待をもっていることが分かった。

牛の観察については、「牛さんは番号がついている」「なでなでしてたら、すごい勢いでうんちをしてたからびっくりした!」「牛さんのおっぱいがふわふわで」「牛の舌はざらざら」「牛の乳の数が多い」など、観察して分かったことや、「牛乳は白色ではなくミルク色」「乳搾りの仕方」といった、牧場のおじいさんから聞いたことを保護者に話すようすを回答した保護者も多く見られ、子どもたちなりに観察し、牛とふれあっていたことも明らかになった。

この保護者アンケートでも見られた牛の観察についての声は、牧場体験の翌日に、各クラスで「牛について知ったこと」「発見したこと」のついて話し合ってもらった結果とほぼ一致した。

自分の意見も言い、友達の見聞もしっかり聞くことで話し合いが一番できたベテラン保育者のクラスでは「頭の毛はふわふわでからだの毛はつるつる」「つのがはえている牛さんがいた」「いろんな模様の牛さんがいた」「牛のお乳は先生の親指ぐらいの大きさ」「牛のしっぽが思っていたより長かった」「しっぽをぐるぐるんと振っていた」「牛の舌はざらざら」「牛の舌は赤、黒、しましまだったような」「牛乳はミルク色」「お乳は少しずつ細く出てくる」「搾りたてはあたたかい」「牛もくしゃみをする」「大きな声が嫌い」という声が出てきた。この一つひとつの意見に保育者が「どうだったー？」と全員に聞き返し、話し合いを促すことで、子どもたちは友達の話を見聞こうとし、牛についてよりいっそう興味をもったようであった。自分の意見を言うことに夢中でなかなか友達の見聞を見聞するところまでいかなかったクラスについても「ジャージーという牛がいた」「大きかったー」「つめが大きい」「ちょっと怖かった」「ハートのもようだった」と、一人の見聞に対して同じように「そうそう」「うん、怖かったー」「でも優しかった」「おとなしかったよ」「ダイヤのもようの牛もいたよ」と口々に答えていた。まったく友達の見聞に興味がないわけではなく、話し合いをすることに保育者も子どもも慣れていないための結果かと思われた。



図 17 体験後の話し合いで分かったこと (1)

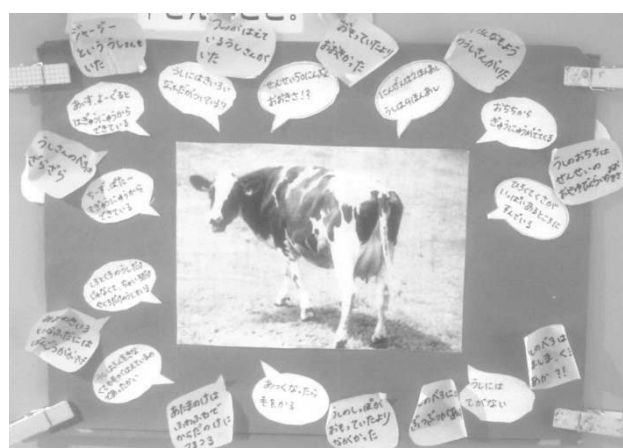


図 18 体験後の話し合いで分かったこと (2)

保育者と研究者で協議して出した牧場体験活動の評価は、以下のとおりである。網掛けされた指標部分が各評価項目に対して保育者及び研究者が出した評価に該当する箇所である。

表 3 「牧場体験」の評価

牧場での約束ごとを知る	態度を伴って知る	理解する	理解しているが態度が伴わない
乳製品を知る	積極的に理解する	学んだことは覚える	興味が薄い
牧場に興味や関心をもつ	草花や牧場の風景にも興味を示す	牧場の雰囲気を楽しむ	牧場を楽しめない
約束を守って牧場であそぶ	声の大きさや言葉に気を遣って楽しむ	時々忘れるが楽しむ	約束が守れない時が多い
酪農家の話を聞く	気持ちを受けとめて聞く	聞こうとする	聞こうとしない

さまざまな牛や動物を観察する	比較しながら細かなところも観察する	楽しんで観察する	あまり観察しようとしな
乳搾りを体験する	牛の気持ちを考えて搾る	乳搾りをする	乳搾りができない
搾りたての牛乳を飲む	牛の気持ちを考えておいしく飲む	嫌いでも飲もうとする	飲めない
友達と協力してアイスを作る	友達と協力して楽しく作る	とにかく作る	作れない
牧場体験について友達と話し合う（発表）	自分の意見を友達に伝えることができる	先生に自分の意見を伝えることができる	意見が言えない
牧場体験について友達と話し合う（聴取）	友達の意見をしっかり聞くことができる	時々集中できないが友達の意見を聞く	友達の意見は聞けない

牧場でのさまざまな体験は子どもたちが事前学習で学んだ結果がはっきりと態度で示されたうえで楽しんだことが明らかになった。お昼ごはんを食べた後、牧場にいるさまざまな虫に興味を示す子どもや、風景を楽しむ子どもたちがたくさん見られ、じゅうぶんに牧場を楽しんだと思われる。

観察については、子どもたちの観察結果や観察時のつぶやきを保育者が拾い上げて深めることができなかつた反省が含まれている。幼稚園では夏期も預かり保育を行っているため、全職員が参加することはできず、年長児クラス担任3人を中心に、補助で入った他学年担当の保育者及び園長、バスの運転手、体操担当の男性保育者（幼稚園教諭ではない）、計9名の大人で対応することになった。限られた人数で86名の子どもを見守り、また1名の牛乳アレルギー児に対しての配慮を行うことが第一になるため、観察の際に子どもの言葉を拾い上げまとめるという役割の必要性を今回の体験を通して保育者自身が気づいたということだけでも次年度以降の保育につながるのではないかと考える。

牧場体験後の話し合いについても、事前学習と同様、話し合うことについての指導や援助の仕方の差がクラス間で出た結果となった。次年度以降の保育への課題となった。

4.3.3 牧場体験後の表現活動（7/23：絵日記，9/4：お手紙，9月～10月：造形）

牧場体験後の表現活動で成果があったものは、大きく3つである。1つめは、感動を次の日の朝にそのまま絵によって表したことである。2つめは、夏休み明けに牧場の人たちへ感謝の手紙を書いたことである。3つめは、造形活動として子どもたちが作りたいと言って始めた牛の工作である。他にも、牧場体験後の表現活動としてはボディペインティングで牛になろうとしたものや、動物体操で牛になろうというものがあった。ボディペインティングについては、子どもたちが白と黒よりさまざまな色で楽しみたいという気持ちが強くなりねらいからはずれたため、報告からは除外する。また、動物体操についても、秋の天候不良により運動会の他の練習や音楽会などに時間を取られ、落ち着いて実施することが困難になったため、報告からは除外する。

この活動の5領域への対応は以下のとおりである。

- 1) 領域「健康」：さまざまな活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- 2) 領域「人間関係」：牧場の人たちに感謝の思いをもって活動する。自分でやりとげるとともに友達と楽しく活動する。
- 3) 領域「環境」：絵などで表現することで牛や牧場への興味や関心をさらに深める。牛の模様で見つけた線対称の図形に興味や関心をもつ。
- 4) 領域「言葉」：手紙を書くことで、牧場の人たちへの感謝の気持ちを伝える。
- 5) 領域「表現」：牧場体験での思いや感動をさまざまな形で楽しく表現する。

また、五感での学びとの関連は以下のとおりである。

- 1) 視覚：牛や牧場で見たことや見た時の思いを表現する。
- 2) 聴覚：牛や牧場で聞いたことや聞いた時の思いを表現する。
- 3) 触覚：さまざまな感触の素材を使って表現する。
- 4) 嗅覚：牧場のにおいも含めて牧場や牛をとらえて表現する。
- 5) 味覚：牧場で味わった味を思い出して表現する。

牧場体験の次の日に絵日記を描くことで、牧場での体験や思いを絵にした。牛の力強さや大きさ、牛の爪、長いしっぽを表現したり、乳搾りの体験からか乳の部分をきちんと表現したり、また、牛の優しい目を表現するなど、子どもなりに楽しかった思い出や、牛と触れあって感じたことを絵でいきいきと表現した。

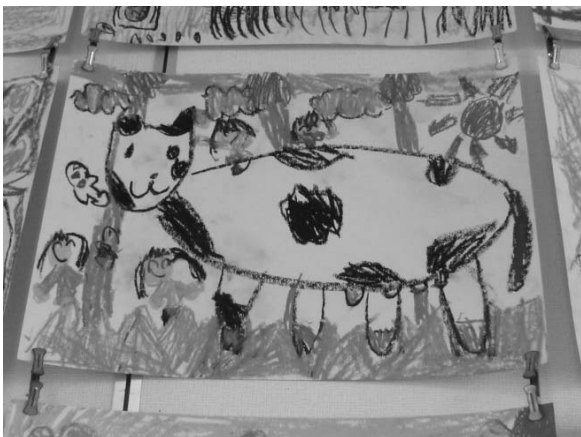


図 19 牧場体験の次の日に描いた牛

9月に入って最初に、牧場体験でお世話になった牛のベティちゃんや牧場の人たちにお礼のお手紙を書くことにした。新光明池幼稚園では文字指導はしておらず、文字を書ける子どもは文字で書いてもいいし、絵で描いてもいいと伝えて手紙を一人ひとりが書くことにした。手紙は折り紙を使い、牛の模様で見られたハート型やダイヤ型にしようということになり、保育者が線対称の図形を1つ見本として作り方を提示して、どのような形にするかは子どもたちに任せた。線対称の図形に興味をもった子どもたちはさまざまな線対称の図形を切って楽しんだ。

自分のこだわりがある子どもは特に線対称にこだわらず、手紙にしたい形を子どもたちが自ら考えて作ってもよいことにした。

幼稚園では年長児でも文字指導もしていないが、86人中83人が文字を使って手紙を書きたいという意欲をもって文字を書いた。3人のうち2人は自分なりの文字（実際には筆記体のような線）を使って書き、保育者に「ありがとうって書いたよ」と見せに来て満足そうだったとのことだった。1人は絵で牛を描いていた。

「今までも遠足等でお世話になったところに手紙を書く活動はしていたが、ここまで文字で書きたいとこだわりを見せたのは初めてで驚いた」と保育者も事後インタビューで話しており、今回の牧場体験でお世話になった人たちだけではなく、特に乳搾りをさせてくれた牛のベティちゃんにお礼を伝えたいという子どもたちの感謝の思いの強さを保育者全員が感じ取っていた。



図 20 牛に手紙を書く子どもたち



図 21 歩いて文字を探し出す



図 22 牧場に送った手紙



図 23 たくさんの「ありがとう」

その後、9月中旬からの設定保育の造形活動で「何を作ろうか」と子どもたちに保育者が聞いた時に「牛を作りたい」という子どもが複数いたので、牛を作りたい子どもは作っていいよと保育者が応えたところ、徐々に子どもから「僕も」「私も作りたい」という声があがったので「廃材で作しましょう」ということだけ約束として提示し、子ども一人ひとりに自由に作成させることにした。幼稚園では造形の専門の先生が指導に来ているが、今回の牛の絵及び造形は専門の先生の指導は受けていない。そのような状況で、子どもたちが工夫して作っている姿を保育者は1ヶ月にわたり援助していった。



図 24 牛の作品

絵に続き、牛の乳をしっかり表現した子どもが多かったこと、しっぽや爪までも表現した子どもや牛の優しい表情を絵や造形全体で表現した子どもたちの作品は、11月に開催された作品展にも掲示することになった。作品展は基本的に造形専門の先生指導のもとで作られていくため、牛の絵や造形作品は飾る予定はなかった。しかし、保育者たちが「子どもたちの学びとその思いを保護者にも伝えたい」という気持ちになり、造形展の隅に今回の牧場体験プログラムの概要と、学んでいる子どもたちの写真と、子どもたちの言葉を添えて展示したと事後インタビューで話していた。

保護者からも、「本当に楽しかったのがよく分かります」「今でも、牛乳を見ると乳搾りのことを話しています」「(12月の)食育も楽しみです」という声をたくさんいただき、とても高く評価された。この作品展での保護者からの言葉の数々は、保育者にとってもさらに励みになったと事後インタビューで明らかになった。

保育者と研究者で協議して出したこの表現活動の評価は、以下のとおりである。網掛けされた指標部分が各評価項目に対して保育者及び研究者が出した評価に該当する箇所である。

表 4 表現活動（絵・手紙・制作）の評価

牧場の思い出を絵に描く	観察したことや自分の思いを表現する	絵を楽しんで描く	絵を描くのに苦慮する
-------------	-------------------	----------	------------

牧場に手紙を書く	牛や牧場の人に思いを伝えようとする	手紙を書く	何と書いていいか分からず悩む
牧場の手紙の形を楽しむ	自分なりに工夫して形を作って楽しむ	保育者の見本どおりに楽しむ	形を楽しまない
牛への思いを造形作品として表現する	観察したことや思いを工夫して表現する	牛を楽しんで作る	牛を作りたいと思わない

牛の絵を描くことと牧場への手紙を書くことは、保育者と研究者で協議したうえで最初からあらかじめ設定して行った活動であったが、子どもたちの意欲はかなり高いと思われた。絵を描く活動は、保育者が設定した時間より早く起きた子どもたちが「今日は絵を描くよ」という保育者の言葉に、子どもたちが進んで描き始めたところや、手紙も文字で書きたいと思う子どもがほとんどであったこと、手紙の形を切りながら「牛さんの模様と一緒に」と言う子どもの姿などから、子どもたちが牧場体験を楽しみながらもその思いを深めて表現していたことが分かった。また、牛の造形作品については、子どもたちから作りたいという声が出てきたことを受けて始めた活動であったので、子どもたちの思いや観察の結果を子どもたちなりに一人ひとりが表現したと言えよう。

4.3.4 牧場体験後の食育活動（12/5）

お手紙を書いて送った後、「牛さんから牛乳をいただいたけど、どうしよう？」と保育者が投げかけるという流れで、子どもたちと大事な牛乳でバターを作ることとした。5領域への対応は以下のとおりである。

- 1) 領域「健康」：牛からもらった大切な牛乳という思いを大事にしなが、牛乳や乳製品について、調理体験を通して、より牛乳や乳製品への関心を高め、飲んだり食べたりすることに興味をもつ。
- 2) 領域「人間関係」：調理体験を友達と協力して行うことを楽しむ。
- 3) 領域「環境」：牛や牧場への興味や関心をより高める。牛乳からバターができる不思議さを感じる。
- 4) 領域「言葉」：保育者の言葉をしっかり聞き、楽しむ。友達と協力するために思いを言葉で伝え合う。
- 5) 領域「表現」：おいしい気持ちを友達と表現しあうことを楽しむ。

また、五感での学びとの関連は以下のとおりである。

- 1) 視覚：牛乳からバターになるようすを観察する。
- 2) 聴覚：牛乳からバターになる時の音の変化を楽しむ。
- 3) 触覚：牛乳から作ったバターに触れる。
- 4) 嗅覚：特別な牛乳から作ったバターのにおいを楽しむ。
- 5) 味覚：特別な牛乳、牛乳から作ったバターの味、また、残ったホエイの味を楽しみ、牛乳や乳製品への興味や関心を高める。

手作りバターは振る作業が大変なうえ、日持ちしないため作りすぎると消費できないこ

とや、個々に家に持ち帰らせる際の衛生面の問題も考慮し、グループ活動にすることで、その場で食べ切れる量を協力して調理することとした。

5～6人のグループで1つのペットボトルを協力して振ることで調理すると仮定し、何度も担任保育者と研究者で実験し検討した。その結果、パステライズ牛乳 120cc と生クリーム(動物性・脂肪分 35%)80cc を混ぜ、最後に塩を少量入れて作ることにした。

容器は、子どもが持ちやすいもの、バターができる過程が見やすい透明のもの、強く振ることが予想されるため割れない素材のもの、かつ衛生的にも問題のないものという4点を考慮し、使いきりのペットボトルを購入した。

子どもたちには「牛さんの搾りたてに近い特別な牛乳」としてパステライズ牛乳のことを伝え、材料と手順を説明した。どのクラスの子どもたちもしっかり聞くことができた。また、実際の調理体験も一度夏にアイスクリームを作った経験もあり、グループで協力して振る順番を決めて活動していた。

疲れず楽しめるように振っている間は音楽を流すかピアノを弾いて励ますことにしていたが、グループ活動で交代しながら振ったことや、保育室での初めての調理体験ということもあって、音の必要はなかったと保育者が感じるぐらい元気に振っていた。机の周りを



図 25 バターづくり



図 26 ホエイも飲んでみました



図 27 バターができました



図 28 みんなで食べました

1周しながら振り、リレーのようにしていたグループもいた。

急いで振らないと手の熱でうまくいかないと感じていた保育者もいたため、観察についてはじっくりと時間が取れたグループと取れなかったグループもあった。そこで、音楽を止めて保育者が各グループを巡視することができるようにしたことで、「今どんなようす？」「音はどんな音？」と声をかけることができ、子どもたちも、ペットボトルの中の音や色などに関心をもつことができた。1つのクラスではホエイに興味を示し、「においが牛乳みたい？」「飲みたい！」と言う子どもが出てきたため飲む活動もバター試食の前に加えた。他の2クラスでは、補助に入ったフリーの保育者がホエイを流してしまい、子どもが興味をもったが飲むことができなかった。

作ったバターはクラッカーに塗って全員で試食した。全員が「友達と一緒に作った」「自分も一生懸命がんばって振った」ということで、満足なようすであった。子どもたちは、味だけではなく「バターふわふわ」「黄色より白い」と感触や色も楽しんでいた。

保護者へのアンケートから、このバターづくり体験で子どもに身についたと思われることは「バターが牛乳から作られるという知識」という結果が多く、次いで「友達と協力して活動する楽しさ」「料理の楽しさ」「不思議さ・探究心」であった。分量や特別な牛乳の名前（パステライズ牛乳）のこともしっかり記憶していて、家でも作りたいと話した子どももいたことが明らかになった。また、アンケートの空白部に今回の食育のレシピとホエイについてのミニコラムを掲載したが、その部分を切り取ってアンケートを提出した保護者も数名見られた。さらに「牛乳で子どもと一緒にできる料理をもっと教えてほしい」「幼稚園の畑で獲れた野菜でピザを作ってはどうか」など、意欲的な意見も見られた。「食への感謝」については、回答が少なかったが、自由記述欄で「特別な牛乳で作ったから大事に食べたと話していた」「腕がすごく疲れたけど最後まで一生懸命振ったことを話してくれた」といった回答も見られ、子どもなりに「食べ物を大事にしよう」という気持ちはあったことが感じられた。

しかし、「嫌いな食べ物を克服する力」といった項目への回答はほとんど見られなかった。この活動でバターを残した子どもはいなかったことから考えると、バターとしては食べることができたけども、それが牛乳を飲もうという意欲にまでは転移しなかったようであった。さらに、「料理の大変さや苦労」といった項目への回答もほとんど見られず、自由記述を見ても楽しかった話（疲れたけど楽しかったという話も含む）しかなく、食育という観点では、楽しかったがもう一步踏み込んで考えるところまでは至らなかったと考えられた。

保育者と研究者で協議して出したこの食育活動（バターづくり）の評価は、以下のとおりである。網掛けされた指標部分が各評価項目に対して保育者及び研究者が出した評価に該当する箇所である。

表5 「バター作り」の評価

牛乳からバターができることに興味や関心をもつ	材料や分量を覚えるぐらい理解する	バターづくりを楽しむ	興味がない
------------------------	------------------	------------	-------

牛に感謝してバターを美味しく作り食べる	牛からのプレゼントだと大切に思って調理活動に参加する	最後まで大切に牛乳を使い食べ切る	作らない・食べない
牛乳が苦手でもバターにすることで摂取する	バターのおいしさから牛乳を飲もうと意欲的になる	バターはおいしく食べる	バターも食べたくない
バターができる過程を観察する	音や色、牛乳の変化を理解しながら振る	時々、保育者に声をかけられて観察する	観察しない
友達と協力して調理する	協力して調理する	時々、協力できない時がある	協力できない
保育者の話を聞いて調理する	保育者の話を聞いて調理をする	保育者の話を聞けない時がある	保育者の話を聞かない
友達と楽しく食事をする	友達と食事を楽しむ	友達と食事をあまり楽しめない	友達と一緒にいない
調理する大変さを知り感謝する	調理してくれる人や食にかかわる人に感謝の気持ちをもつ	調理は楽しいけどしんどいこともあると気づく	調理は大変だと思うが感謝はしない
乳製品について興味や関心を広げる	他の乳製品の調理についても知ろうとする	お店などでバターが出てきたら興味や関心をもつ	興味や関心がもてない
家でも調理しようという意欲を育てる	家庭でも作ろうとする	家庭でも作りたいと言ったりする	家庭では作りたいという気持ちにはならない
おいしさを友達や保育者・保護者などと言葉で共有する	おいしい気持ちを言葉で伝え合う	おいしい気持ちを保育者など大人には表現する	おいしい気持ちを表現しない

アイスクリームを作ったことはあったが、幼稚園では初めての食育活動ということもあり、保育者も「まずは楽しく安全に調理ができて、おいしいと思える」ことを第一に考えて援助に入ったこともあり、観察への時間配分や、他の乳製品についての興味や関心を広げるような視点をもつには至っていなかった部分もある。以前に見せた紙芝居『牛乳からできるさまざまな乳製品』の話との関連をもっと持たせればよかったという反省も出た。保護者アンケートからは、保護者の食育への意欲が高まっている姿が感じられ、その気持ちが子どもから得た可能性も高いということで、子どもの調理への興味や関心も広がっているのではないかと推測された。

観察については、保育者も慣れてきて余裕が出てきた頃からは、「一緒に見てみよう」と観察や音を聞くことへの興味や関心に子どもたちを誘導できたという結果になった。

感謝の気持ちについては、作ったバターは「もったいない」とみんなが気持ちを伝え合っていて食べたり、ホエイが飲めなかった子どもも悔しそうな表情をし、残念がっていたこと

から、牛には感謝をする気持ちは子どもたちももっていたことが保育者と研究者で共有された。しかし、そこから調理活動そのものへの感謝までは発展させることはできなかったと思われた。

4.3.5 遠隔交流による活動 (3/7)

卒園式を2週間後に控えた頃に、Skypeによる遠隔交流を行った。遠隔交流先は夏に訪問した牧場をお願いした。5領域への対応は以下のとおりである。

- 1) 領域「健康」：牛と再会することで、牛乳や乳製品について興味や関心を高める。
- 2) 領域「人間関係」：牧場体験を手伝ってくれた牧場の人たちに感謝の気持ちをもつ。
- 3) 領域「環境」：牛や牧場への興味や関心をより広げたり深めたりする。
- 4) 領域「言葉」：牧場の人たちの言葉をしっかり聞き、楽しむ。牧場の人たちに感謝の思いを言葉で伝える。牛のために自分の声の大きさを調節し、楽しむ。
- 5) 領域「表現」：言語表現だけではなく、映像で伝わるような表現で牧場の人たちに感謝の思いを表現する。

また、五感での学びとの関連は以下のとおりである。

- 1) 視覚：牛や牧場を映像で見る。
- 2) 聴覚：保育者や牧場の人たちの話を聞く。映像の先に伝わる声に配慮する。
- 3) 触覚：該当なし。
- 4) 嗅覚：該当なし。
- 5) 味覚：該当なし。

幼稚園の遊戯室に Skype を年長児全員で試聴できるように設定した。牛や牧場の人たちに成長した姿を見てもらおうということで、製作物などの写真を用意し、OHC で映すことや、歌で感謝の気持ちを伝えようということになっていた。しかし、電源の関係やパソコン操作が得意な保育者がいなかったことから、製作物などの写真はカメラの前に保育者が持って行って写すことにしたり、スピーカーをパソコンの音声用とキーボードの音声用とを2台配置し、別個に管理することにしたりした。最終的には下図のような構成を組んだ（キーボード等の配置は割愛）。

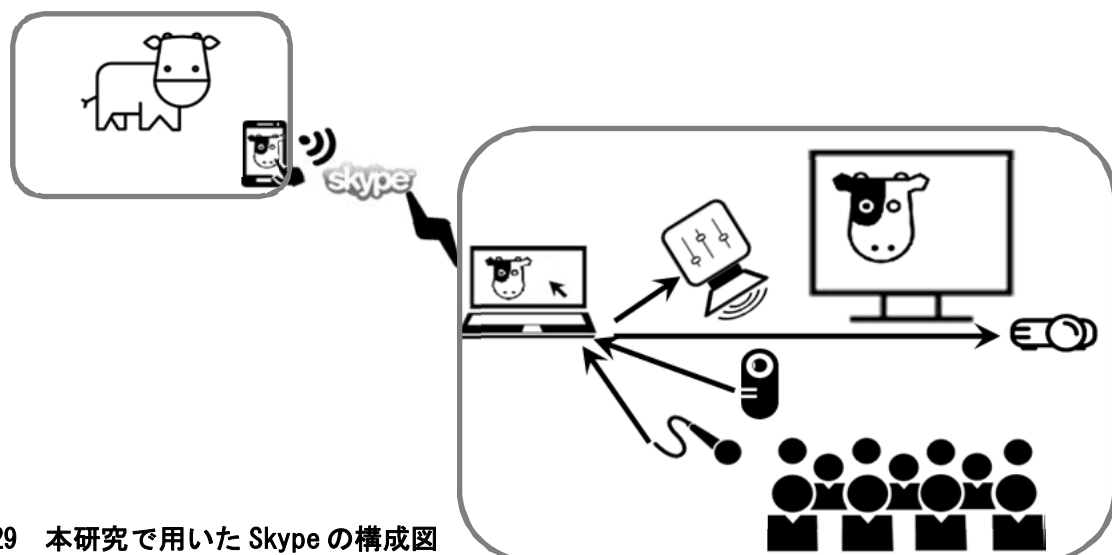


図 29 本研究で用いた Skype の構成図

牧場との Skype ということで、園長と研究者が牧場に行き、タブレット型に変形可能なノートパソコンを牧場では使用することにした。音声はパソコン上のものと子どもたちの声とを制御するため、簡易ミキサー付きスピーカーを使用した。web カメラは三脚に固定できるタイプのものを使用し、写真なども映しやすくした。映像は幼稚園のスクリーンに映し出し、全員で見ることができるようにした。インターネット回線は、幼稚園の職員室に導入されている光回線無線 LAN で職員室の隣の遊戯室で受けることができるようにした。牧場では研究者のスマートフォンをテザリングして通信回線を確保した。牧場側の回線速度の遅さや、子どもたちの集中力を考えて、15 分間の交流に制限することにした。

子どもたちには、「今日は牛さんと再会するよ」と話をして遊戯室へと誘導した。子どもたちは「会いたい!」「ありがとうってまた言いたいー!」と、とても楽しみにしていたと保育者へのインタビューから明らかになっている。Skype についても、家庭で祖父母とのテレビ電話などを経験している子どももいるようであったが、「どうやって会えるん?」と子どもが再会に興味や関心を高めていたことも明らかになった。また、「ありがとうって言うだけ?」と保育者が問いかけながら、今年度1年間の牧場体験を核にした全ての活動をもう一度思い起こさせることで、子どもたちの興味や関心を高めようと工夫した。その1つとして、Skype がつながるまでの間、牧場体験前に見せた紙芝居をもう一度読み、思い出すための援助も行った。披露する歌の練習も集中力が増した。

Skype がつながり、園長先生がスクリーンに表れると、子どもたちは手を振って喜んでいた。しかし、一番歓声があがったのは、乳搾りを教えてくれて、全員に付き添ってくれた牧場のおじいさん(高松昌弘さん)が映された時であった。子どもたちにとって、楽しかったけど少しどきどきして怖かった体験をそっと隣で支えてくれた牧場のおじいさんの存在はかなり大きかったことが明らかになった。

牧場からの回線速度が低いために、音も聞き取りづらかったこともあったそうだが、子どもたちは一生懸命、聞き漏らさないようにと集中しておじいさんや園長先生のお話を聞き、元気に答えていた。おじいさんに「覚えてますか?」と聞かれた子どもたちの中から



図 30 Skype で再会



図 31 集中してスクリーンを見ながら手あそびを再現する子どもたち

自然と「パー・ギュッ・1・2・3！」と聞こえ始め、子どもたち全員の大合唱になったことは、そこにいた大人たち全員が驚き、感動した瞬間となった。

園長とおじいさんとで、乳搾りをさせてくれた牛（ベティちゃん）に会いに牛舎に向かう間も、「その階段を上がるねん」「懐かしいなあ」「そっち曲がったらアイスクリーム作ったところ」「ポニーは元気ですか？」と、子どもたちが約半年前の記憶に支えられた思いを本当に嬉しそうに話していた。牛のベティちゃんに会えた時には「牛にも聞こえてるから大きな声はあかん」とお互いに注意しあい、声の大きさに気をつけて話していたことも明らかになった。

夏にはいなかった子牛の誕生や、見難いはずのスクリーンからより詳細に牛の模様やようすを観察し言葉に表す子どもたちの姿に、15分と限定せずに、臨機応変にもう少し時間を取ればよかったという保育者の反省も見られたほどであった。

15分でSkypeを切断したが、盛り上がりすぎて歌を歌うところまで進まず、「歌えへんの？」という子どもたちの声に「歌おう」「牧場に届くように歌おう」と歌を歌って遠隔交流を終えた。

遠隔交流体験では、子どもたちの「もっと牛を見たい」「もっとお話がしたい」「もっと成長した姿を見て欲しい」という気持ちが随所に言葉や態度で表れた活動になったと思われる。なかでも、園長とおじいさんが牛舎の階段を上りだした時の「あの臭いまで伝わってくるなあ」と言った子どもの声は、その場の全員が笑った印象的な一言であった。遠隔交流でも臭覚や触覚も思い出させるほど、子どもたちにとって心に残った牧場体験であったことが牧場のおじいさんと遊戯室に集まった子どもたちと保育者全員で共有できたことに、この遠隔交流を行った意義があったと思われる。

牧場の人たちも初めての遠隔交流に驚いていらっしかったが、最後には本当に楽しかった、よかったとおっしゃってくださった。

保育者と研究者で協議して出したこの遠隔交流活動の評価は、以下のとおりである。網掛けされた指標部分が各評価項目に対して保育者及び研究者が出した評価に該当する箇所である。

表6 「牧場との遠隔交流体験」の評価

牧場の人に感謝の気持ちを伝える	言葉や歌で牛の気持ちを考えながら伝える	ありがとうと言ったりあらかじめ練習した歌を歌ったりする	気持ちを伝えようとししない
牧場の人のお話をしっかり聞く	心から聞き取ろうという気持ちで集中して聞く	時々集中できない時がある	聞こうとししない
牛や乳製品についての興味や関心が高まる	牛への興味や関心が高まり、乳製品への関心も広げる	牛への興味や関心は高まるが、乳製品までは広がらない	興味や関心が高まらない
牧場への興味や関心が高まる	牧場の雰囲気を感じ出しながら興味や関心を高める	牧場にまた行きたいとは思う	興味や関心が高まらない

経験を思い出して感謝の気持ちで卒園を迎える	1年間を思い、感謝の気持ちで卒園式を迎えようとする	1年間を思い出して楽しむ	経験が身につけていない
-----------------------	---------------------------	--------------	-------------

幼稚園や保育所での ICT 活用は小学校以上の導入と比較しても格段に少なく、否定する現場が圧倒的に多いことが知られているが、今回のこの遠隔交流を実施した保育者たちは「こういう可能性があるのならパソコンの保育への導入もいいと思う」「ぜひまた来年もやりたい」と大きな意欲を見せた。何よりも実体験と融合した活用であったことや、遠隔交流をすることでより子どもたちの興味や関心が高まったこと、大きな感動を年長児全員で共有できたことが大きかったと思われる。

紙芝居を改めて読んだだけでは得られなかった実感が得られたと保育者へのインタビューで明らかになっている。そこには、牛や牧場への興味や関心だけではなく、牛乳や乳製品に触れる度に思い出すような心に残る体験であり、その体験をより深めることができた遠隔交流であったと思いたいという保育者の思いがインタビューから感じられた。

4.4 まとめと今後の課題

牧場体験を核にしたプログラムを実施したことで、領域「健康」に含まれる、食（牛乳・乳製品）への興味や関心、領域「環境」に含まれる、自然環境（牧場や動物）への興味や関心が高まり、保護者も実感するほどの幼児の変容が見られた。

さらに、ただ牧場体験を追加しただけではなく、「思いやりの心を育てる」ことを園の目標にしている幼稚園の実情を踏まえて牧場体験とそれに関するプログラムを意識して実施することで、先行研究では見られなかった領域「人間関係」に含まれる社会性の発達、領域「表現」及び「言葉」への興味・関心が高まった。牧場の人達や牛と直接ふれあった経験が、幼児の「手紙は自分で書いた字で伝えたい」という意欲を高め（国語の基礎となる力）、保育室での「ひらがな探し」に発展したし、身体表現や造形表現では、自分の興味や関心に応じて自主的に表現活動に取り組んだ。領域「環境」も、自然環境だけではなく、「牛乳」を媒介とした買い物場面（社会環境）への興味・関心も高まった。

以上の成果は、牧場体験を含む食育プログラムが幼児にとって心から楽しみ学ぶことができるものであったからだと思われる。これらの結果から、幼稚園の目標を達成することを可能にした具体的なプログラムを本研究では開発することができたと考える。

しかし、実際にプログラムの活動を個別に研究者と協議してルーブリックを活用し評価したことや、交流先の私立幼稚園（坂戸あずま幼稚園）から保育者たちが学ぶことで課題も見えた。それは、以下の3点に集約される。

1点目は、「健康」の領域にあたる「牛乳嫌いの克服」である。活動を通して乳製品に興味をもったり調理体験に興味をもつことはできたが、嫌いな子どもにとっては、克服できない結果になることもあることが明らかになった。小林・古賀(2009)も、幼児は知識を得たり感動したりすることで食に関心をもつため、心情面に訴える保育内容によって偏食の改善傾向は見られるが、偏食改善が見られない幼児も存在し、個別対応が必要である⁵⁾と結論づけられている。本研究でも、どうしても飲めなかった子どもが1人、牧場の牛乳は

飲めたが家に帰ると飲めないという事例も見られた。牧場体験を中心に感動し、知識も得たが、先行研究同様の結論を得た。本研究の保育者と研究者の検討会では、その飲まなかった子どもが「ごめんなさい」と言って残したことだけでも大きな成果ではないかと考えている。しかし、今後は「嫌いでも食べる、飲むことができ、好きになる」プログラムに挑戦し、改善する必要性がある。

2点目は、「言葉」の領域にあたる「人の話を聞く」ことについて、話し合いの実践に関する課題である。ベテランの保育者は聞くことの大切さを踏まえて実践するが、若い保育者ほど、表現すること、話すことを自らが聞くことに集中してしまい、子どもたちと共有するという意識が少ないことが明らかになった。遠隔交流での集中力を見て「子どもが聞きたいと思えるような空間づくりや話の進め方」について考えることができたという若い保育者たちの言葉には、次年度からの日常保育への反省も込められていた。また、ベテラン保育者は「話し合い」活動の自らの保育経験を若い保育者に伝えながら実践することの重要性を改めて認識して下さった。そのうえで、『話し合い』をクラスの中だけではなく学年全体で共有することで、子どもが、他の子どもの意見を知りたい、聞きたいと思うだろうし、若い保育者にとっても、他のクラスの保育援助に触れ、保育者としての学びにつながるだろう」と話し、今後のないよう改善の課題の1つとして挙げていた。

3点目は、「環境」の領域にある「科学的な思考力の基礎」を培う視点で保育を進める難しさである。例えば、バターを作る調理活動では、グループで協力して失敗なくおいしく作ることにとらわれすぎて、バターができる過程をじっくりと観察するといった、調理活動で生まれる興味や関心に基づく幼児の学びを深めきれなかったことなどである。

特に、課題の2点目、3点目に見られるように、幼児教育においては、特に知的活動については軽視され、否定的にもとらえられがちであるが、今回も同様の傾向が見られた。土居健郎が、ゲーテの「自分の心を伝えることは自然 (Natur) である。伝えられたものを、伝えられたままに受け取ることは、教養 (Bildung) である。」を引用して「情動の理解は教養である」という旨を示した⁶⁾ことから、幼児にとって社会性や表現力は、知性や科学的な思考力の育みなしには深まらないと考えられる。知への視点を保育に導入することで、幼児の「思いやり」の育ちを構成する「社会性」や「表現力」をより確かなものにする可能性もあると思われる。すなわち、知への営みが深まるような保育プログラムとして改善する必要性を大きな課題として残していることが言えるであろう。

最後に、就学前教育の現場における牧場体験の留意点についてまとめる。

1つめは、幼児が出向いて体験できる牧場が少ないことである。通常の遠足でもバスに乘車するのは1時間が目安となる。本研究でも、幼稚園から近くの牧場（バスで1時間以内）ということで探していたが、まず大阪府に牧場体験の認証牧場が存在しないことが明らかになった。隣県である奈良県のラッテたかまつ牧場が幼稚園から一番近く、ご協力をいただいて本研究を遂行することができた。

さらに、1日の保育時間が約4時間と文部科学省により定められている幼稚園にとっては、牧場でさまざまな体験をさせる場合、遠足の日に行くことも難しいことが見えてきた。特に子どもの送迎に園バスを使用している幼稚園や、外部と連携して課外保育を実施している幼稚園では、時間の制約がかなり厳しい。子どもたちを9時に登園させても14時か

遅くとも 15 時には帰園が必要な事情もあり、日程だけではなくプログラムの時間の確保にかなり苦労する。

本研究では、幼稚園での 1 泊 2 日の宿泊保育を利用し、1 日目を今までの遠足から牧場体験に変更し、幼稚園の目標と照らし合わせながら、牧場でも子どもに負担のない活動に限定したり、幼稚園でできることは幼稚園で実施するなどの選択を行うことによって、子どもたちも保育者も時間に追われずじっくり牧場であそぶことができるように計画・実施することができた。

したがって、幼稚園での実施は、各園の事情に合わせて、宿泊保育を利用したり、保護者や外部業者などとの連携を密にして時間を確保するなどの配慮が非常に重要である。そのうえで、限られた牧場での時間をどのように過ごすかについても牧場と相談しながら配慮する必要である。牧場では、搾乳、ほ乳、ブラッシング、バターづくり、アイスクリームづくりなどさまざまな体験ができるが、ただたくさん経験して終わるのではなく、子どもたちがじっくり考え、心から感じる時間を確保できるような体験プログラムを考えながら、各園の目標に合わせて適宜選択していくことが重要であると考えられる。

【引用・参考文献】

- 1) 古郡曜子・山口宗兼(2012)「幼稚園における食育カリキュラム作成に関する基礎的研究—幼稚園教諭へのインタビュー調査を通して—」『北海道文教大学研究紀要』第 36 号 23-34.
- 2) [おおさか食育通信—健康栄養情報] 大阪府食育推進プログラム「平成 20 年度 幼稚園・保育所における食育実施状況アンケート」結果(2014.03.31)
http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou_media/20nen_condition02.pdf
- 3) 田中博之(2011)「牧場での体験学習活動が、自動の意識や行動に及ぼす教育的効果の検証」社団法人中央酪農会議酪農教育ファーム推進委員会.
- 4) [おおさか食育通信—健康栄養情報] 大阪府食育推進プログラム「平成 20 年度 大阪府における幼児の食生活状況アンケート」結果(2014.03.31)
http://www.osaka-shokuiku.jp/kenkoeiyo/kenkoueiyou_media/20nen_condition01.pdf
- 5) 小林小夜子・古賀克彦(2009)「幼児の偏食改善に向けた保育実践研究—加工を施さないトマトの場合—」『幼年教育研究年報』第 31 巻 23-28.
- 6) 土居健郎(1992)『新訂 方法としての面接—臨床家のために』医学書院 9-10.

5. 主な論文発表等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表 計 1 件]

松山由美子・内藤真希(2014)「幼稚園における牧場体験を取り入れた保育プログラムの開発」日本保育学会第 67 回大会 発表論文集 p.757

松山由美子(2014)「幼稚園における牧場との遠隔交流プログラムの開発」日本教育工学会第 30 回大会全国大会 発表予定

[雑誌論文 計 0 件]

松山由美子・内藤真希(2014)「幼稚園における牧場体験を取り入れた保育プログラム—思いやりの心を育む—」『四天王寺大学紀要』投稿中

6. 研究組織

(1) 代表研究者

松山由美子（四天王寺大学短期大学部保育科・准教授）

(2) 共同研究者

田中博之（早稲田大学教職大学院・教授）

内藤真希（大阪府・新光明池幼稚園・園長（武庫川女子大学・非常勤講師））

鈴木悦子（埼玉県・坂戸あずま幼稚園・園長）